

弥谷寺所蔵本「異尊鈔」梵字の声点について (二)

森 孝宏*

The Notation of Sanskrit Characters in 'Isonsho,' a Buddhist Scripture Owned by Iyadaniji Temple (2)

Takahiro MORI

Synopsis

This paper describes an analysis of many samples of "syo" points (accent marks) attached to Sanskrit and transliterated Chinese characters in "Isonsho," a Buddhist scripture owned by Iyadaniji Temple (Mitoyo City, Kagawa Prefecture). These accent marks do not necessarily correspond with accent marks found in Chinese characters. They are considered to have been added from another point of view. The results of our analysis show that kyou points, a kind of accent marks, fall on longs and diphthongs among hiragana attached to Sanskrit and transliterated Chinese characters. The results support a theory advocated by Professor Numoto at Hiroshima University.

1. 弥谷寺所蔵本「異尊鈔」の書写年代と 声点

弥谷寺(香川県三豊市)は、真言宗の古刹である。
弥谷寺所蔵本「異尊鈔」の奥書に次のようにある。

永仁三年(1295)十月下旬奉伝授之了
青瀧末資金然 有判^ア
秘鈔全部廿八卷奉授現證上人畢
金剛乗沙門性心 花押

署名の行末の、花押のあるべき位置に「有判」とあることから、永仁三年の書写本は本書の祖本であり、後年、花押のある「金剛乗沙門性心」から「現證上人」へ伝授されたものと考えらるべきであろう。その書写年代は、「秘鈔」諸巻にも記述がないため、本鈔本の書写年代は、特定できず、永仁三年(1295)以後としか分らない。

沼本氏の検証した鈔本よりも、はるかに後代の

ものである。

「異尊鈔」は「上・下」二巻の卷子本でこれに、数種の「点」を差してある。¹⁾

朱点 梵字 929例、音訳漢字 466例、
フリガナ 65例

朱圈点 10箇所17字

音訳漢字の「声点」らしきものは、「広韻」の四声とは、必ずしも一致せず、別な基準で差されたものと考えられるが、その基準は未詳であった。音訳漢字と梵字に差された朱点は同質と考えられる。

2. 沼本克明氏の研究

沼本氏は、「訓点資料として見た漢文文献の諸相」で、次のように述べている。²⁾

「悉曇章靈巖寺和尚本敷(東寺201-20)」「大悉曇章(東寺201-3)」「悉曇章慈覚大師請来全雅伝本(東寺201-19)」「悉曇章(東寺201-17)」と小野僧正仁海自筆の「不空羼明(随心院)」の梵字資料の加点は、

*一般教科

ア、四声を区別する。梵語長音を去声、梵語短音を上声で示す。(P14)

石山寺蔵の石山内供淳祐による「悉曇十二章」の

○ 梵語の長短を上・去という声調で区別する。

上声は短音、去声は長音に宛てる。(P15)

本稿では、梵字の声点を中心に、このような加點原則が、弥谷寺所蔵本「異尊鈔」でも当てはまるか否かを、以下検証する。

3. 梵字とフリガナの異同

3. 1. 「¹u・²u」

1) ¹u ²u ³u ⁴u (異尊下P97L4)²
u du ta ku ki ta

2) ¹u ²u ³u ⁴u (異尊下P97L5)
ya bi dya u du ta

1)の「¹u」は短音「u」、2)の「²u」は、長音「ū」であるはずだが、共にフリガナは「ウ」で「上声点」である。

3. 2. 「¹u」

次の「¹u」は、梵字そのものは同じなのに、フリガナと、声点が別な組み合わせになっている。

3) ¹u (異尊上P14L10)

bu da

4) ¹u (異尊上P25L2)

5) ¹u (異尊上P30L8)

6) ¹u (異尊上P31L4)

7) ¹u (異尊上P69L1)

8) ¹u (異尊下P83L3)

9) ¹u (異尊下P110L2)

10) ¹u (異尊上P66L2)

11) ¹u (異尊上P25L10)

12) ¹u (異尊上P25L8)

bu ks ya bi bu ks ya

3)~11)は、フリガナ「ホ」に対し「上声点」であり、10)の音訳漢字もフリガナと同じ「上声点」であるのに対し、12)の二例はフリガナ「ホウ」で「去声点」である。同じ梵字に対し、別なフリガナを施してあり、フリガナと声点がおのおの対応している。

「ホ」 — 「上声点」

「ホウ」 — 「去声点」

これが鍵になりそうだ。

4. 「去声点」を有する例

以下、「去声点」を有する用例を検証してみる。

4. 1. 「- a i」

13) ¹a ²i (異尊上P48L3)

a ma nai

14) ¹a ²i (異尊上P48L3)

15) ¹a ²i (異尊上P48L3)

16) ¹a ²i (異尊上P48L3)

17) ¹a ²i (異尊上P48L4)

18) ¹a ²i (異尊上P49L4)

19) ¹a ²i (異尊下P121L3)

20) ¹a ²i (異尊上P61L2)

bhai s ai dya

21) ¹a ²i (異尊下P121L1)

ji ha vai

これらは、いずれも「去声点」であるが、「タイ・ヘイ」のフリガナのものは、いずれも「去声点」である。

4. 2. 「- o u」

22) ¹o ²u (異尊上P25L5)

sa ha ra

23) ¹o ²u (異尊上P25L6)

24) ¹o ²u (異尊上P25L7)

いずれもフリガナ「ソウ」で「去声点」である。

25) ¹o ²u (異尊上P25L8)

bao dhi

26) ¹o ²u (異尊上P25L8)

27) ¹o ²u (異尊上P35L5)

28) 菩提薩埵也 (異尊上P39L9)

29) 菩提薩埵也 (異尊上P40L1)

30) 菩提婆娑呵 (異尊上P21L2)

31) ¹o ²u (異尊下P110L5)

いずれも、フリガナ「ホウ」の「去声点」であり、音訳漢字も「菩」の「去声点」で、梵字・音訳漢字の声点共に一致する。

32) ¹o ²u (紙背P99L5)³⁾

置駄也

33) ¹o ²u (紙背P116L6)

置駄耶

34) ¹o ²u (紙背P84L6)

置地

35) ¹o ²u (紙背P102L4)

置地

36) ¹o ²u (紙背P116L5)

置地

これらは、「来迎院如来蔵本『大般若経音義』紙背」の音訳漢字でも「去声点」で、「異尊鈔」と一致する。

4. 3. 「- e i」

37) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L4)

i li ne

38) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L4)

39) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L4)

40) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L4)

41) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L5)

42) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L5)

43) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L5)

44) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L6)

45) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L6)

46) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L6)

47) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L6)

48) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L7)

49) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L7)

50) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L8)

いずれのフリガナも「ネイ」で「去声点」である。

51) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P48L9)

52) ^イ ^リ ^ネ (異尊下P121L1)

gau la ji ha ve

53) ^イ ^リ ^ネ (異尊下P121L3)

51)の「^イ」は、「平声点」で、「去声点」と対立するものではない。52)53)は「去声点」である。

54) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P61L2)

om bhai sai dya

55) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P61L2)

56) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P93L8)

57) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P20L5)

58) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P31L7)

'srai ye sva ha

59) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P20L6)

bi ja ye

60) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P57L3)

61) ^イ ^リ ^ネ (異尊上57L7)

62) ^イ ^リ ^ネ (異尊下P121L2)

63) ^イ ^リ ^ネ (紙背P86L5)

惹^イ 曳^イ 尾^イ 惹^イ 曳^イ

64) ^イ ^リ ^ネ (紙背P90L3)

尾^イ 惹^イ 野^イ 嘯^イ 嘯^イ 嘯^イ

55・56)は、「^イ・野」のフリガナは短音「ヤ」で、「平声点」である。それに対し、57)~62)の「^イ」はフリガナは長音「エイ」で「去声点」である。

「平声点」 — 「去声点」

の対立ではないが、やはり、長音「エイ」が「去声点」であることは意味があるものと考えらるべきであろう。

4. 4. 「- a m」

65) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P30L8)

sa ma ttha

66) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P31L4)

67) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P69L1)

68) ^イ ^リ ^ネ (異尊下P83L3)

69) ^イ ^リ ^ネ (異尊下P87L8)

70) ^イ ^リ ^ネ (異尊下P110L2)

71) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P66L2)

72) ^イ ^リ ^ネ (紙背P87L2)

三^イ 満^イ 帝^イ

73) ^イ ^リ ^ネ (紙背P88L6)

三^イ 満^イ 帝^イ

74) ^イ ^リ ^ネ (紙背P90L6)

三^イ 満^イ 帝^イ

75) ^イ ^リ ^ネ (紙背P92L6)

三^イ 満^イ 帝^イ

76) ^イ ^リ ^ネ (紙背P95L2)

三^イ 満^イ 帝^イ

77) ^イ ^リ ^ネ (紙背P96L3)

三^イ 満^イ 帝^イ

78) ^イ ^リ ^ネ (紙背P101L3)

三^イ 満^イ 帝^イ 迦^イ 羅^イ

79) ^イ ^リ ^ネ (紙背P109L3)

三^イ 満^イ 帝^イ

65)~71)の「異尊鈔」でのフリガナはすべて「マン」で「去声点」である。「来迎院如来藏本『大般若経音義』紙背」でも「満」で「去声点」である。

80) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P37L8)

pa dma ta re huam

80)の「^イ」もフリガナは「ハム」で「去声点」である。

4. 5. 「- i m」

81) ^イ ^リ ^ネ (異尊下P83L9)

om i ndra ya sva ha

81)の「^イ」も「イン」で「去声点」である。

4. 6. その他

82) 南無^イ ^イ ^イ ^イ ^イ ^イ ^イ ^イ (異尊下)

ja gu ri de va to ki dha P122L6

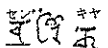
82)は朱圈点で1例ある。以下は、1例ずつのものである。

83) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P14L9)

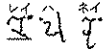
sau pra bhe

84) ^イ ^リ ^ネ (異尊上P14L10)

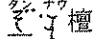
ga bai

85)  (異尊上P31L7)

ca rau ka

86)  (異尊上P48L6)

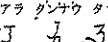
re pa ne

87)  (異尊上P73L10)

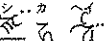
da na

これらもフリガナは長音で「去声点」である。

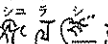
4. 7. 短音に対する「去声点」

88)  (異尊上P35L4)

ra bhna dra ya ya

89)  (異尊下P121L1)

Ji ha va

90)  (異尊下P121L1)

so la ji ha be

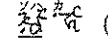
フリガナの短音に対し、「去声点」を差した例は、極めて少ない。「去声点」の大半は、フリガナの長音と一致している。

5. 梵字長母音の例

それらに対し、長母音の切継点画を有する梵字に対しては、「去声点」を差してあるのだろうか

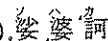
5. 1. 「-a」

多くある例としては、

91)  (異尊上P7L3)

sva ha

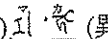
がある。この語は「異尊鈔」には、他に P14L10, P16L8, P20L6, P26L2, P26L6, P31L7, P83L3, P83L9, P87L8, P88L7, P89L5, P97L10, P98L5, P97L6, P63L4, P69L2, P73L, P104L4, P124L2, P121L3, P121L4, P121L8, P101L10, P105L6, P110L5, P111L4, P114L9, P115L5, P117L9, P118L4 の例があるが、すべて梵字は長音「a」の切継点画「^c」を有し、「平声点」である。音訳漢字でも

92)  (異尊上P129L9)

で、「平声点」である。この語は「異尊鈔」には、音訳漢字として他に

下P124L7, 下P124L2, 下P66L2, 下P93L9, 下P21L2, 下P93L9,

の例があるが、すべて「平声点」である。

93)  (異尊上P16L4)

ma ha

これと全く同じものとして

上P16L4, 上P35L5, 上P73L9, 下P89L5, 下P98L5, 下P110L3, 下P121L2, 下P121L2, 下P124L2

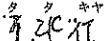
の例がある。梵字は長母音の「^c」の切継点画を

有し、「上声点」でフリガナは短音の「カ」である。

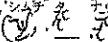
94)  (異尊下P122L6)

ba da ki dha

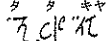
94)は朱圈点の1例のみで、梵字の切継点画「^c」を有するが「上声点」でフリガナは「ト」である。

95)  (異尊上P14L8)

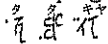
ta pa ga ta

96)  (異尊上P25L3)

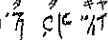
s dhi ta na m

97)  (異尊上P25L5)

ta pa ga ta

98)  (異尊上P25L6)

ta tha ga ta

99)  (異尊上P73L9)

ta pa ga ta

100)  (異尊上P35L6)

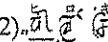
om ta re

101)  (異尊下P110L2)

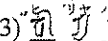
a pra ti ha ta

95)~101)は、長母音「ā」の切継点画「^c」を有するが、フリガナ短音「タ」で、「上声点、平声点」である。

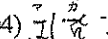
5. 2. 「-i」

102)  (異尊上P14L10)

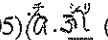
bi lo ki te

103)  (異尊上P25L6)

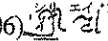
bi rya ba li da

104)  (異尊上P89L5)

ma ha sri ya ye

105)  (異尊上P57L4)

dha sri

106)  (異尊上P31L7)

sri ya sva ha

107)  (異尊上P53L3)

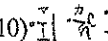
sri ba su sva ha

108)  (異尊上P57L3)

hri

109)  (異尊上P20L6)

hrai dhi sri

110)  (異尊上P98L5)

ma ha sri ye

102)~110)は、長母音「ī」を示す切継点画「^l」を有する。

102)103)は、短音のフリガナ「ヒ」で、それぞれ「平声点」「上声点」である。これらは同梵字で

ある。なにかの紛れであろう。102)の「平声点」は、「去声点」との対立をなすものではないと考えられる。

104)~110)は、長音もしくは二音節と考えられるフリガナに「上声点」を差している。104)~110)は、長音と意識されず、二音節と意識されていたのかもしれない。

拗音・二音節に「平声点・上声点」を差した例は多く拾える。

- 111) 「^ナナ^ハ」(異尊上P20L6, P57L4, P57L7, P61L2, P73L10, P7L3)
 112) 「^ナナ^ハ」(異尊上P4L2, P4L7, P5L2, P5L6, P6L1)
 113) 「^ナナ^ハ」(異尊下P12L1)
 114) 「^ナナ^ハ」(異尊上P20L6, P57L4, P57L7)
 115) 「^ナナ^ハ」(異尊上P25L5, P25L3)
 116) 「^ナナ^ハ」(異尊上P25L10)
 117) 「^ナナ^ハ」(異尊上P58L2)
 118) 「^ナナ^ハ」(異尊上P14L7, P14L8, P16L4, P20L5, P25L4, P25L5, P25L6, P25L7, P57L3, P73L2, P73L9)
 119) 「^ナナ^ハ」(異尊上P14L9)
 120) 「^ナナ^ハ」(異尊上P16L4, P31L5, P31L6, P31L6)
 121) 「^ナナ^ハ」(異尊上P112L9)
 122) 「^ナナ^ハ」(異尊上P73L10)

以上であるが、これらは二音節として意識されていたのであろう。

5. 3. 「-om」

- 123) 「^ナナ^ハ」(異尊鈔上P4L2)

「^ナナ^ハ」は、「異尊鈔」には他に

P4L7, P5L2, P5L6, P6L1, P7L3, P7L3, P14L7, P15L6, P6L1, P16L4, P5L6, P16L7, P20L5, P25L5, P26L6, P5L6, P31L5, P35L6, P37L8, P52L10, P53L3, P53L5, P57L3, P57L7, P58L2, P61L2, P5L6, P63L4, P69L2, P5L6, P73L2, P73L9, P83L9, P84L3, P88L7, P89L5, P97L4, P97L10, P98L5, P101L10, P104L4, P107L6, P110L3, P111L4, P112L3, P114L9, P115L5, P117L9, P118L4, P112L1, P121L3, P121L8, P124L2, P5L6

の「平声点」例が拾え、音訳漢字でも

- 124) 「^ナナ^ハ」(異尊鈔下P89L8, P73L7, P124L7, P127L2)

「^ナナ^ハ」は、「平声点」である。これらの「平声点」は、「去声点」との対立するものではないと考えられる。

5. 4. それ以外の長母音

「-u」 「-e」 「-o」 「-ai」 「-au」

「-am」 「-r」 「-l」の例は、「異尊鈔」からは拾えない。

「異尊鈔」で「去声点」を差した例は、以上である。

6. 長音のフリガナに「去声点」以外を差した例

- 125) 「^ナナ^ハ」(異尊上P20L5)
 na mo bha ga va ta
 126) 「^ナナ^ハ」(異尊上P57L3)
 127) 「^ナナ^ハ」(異尊下P93L8)
 128) 「^ナナ^ハ」(異尊上P25L2)
 129) 「^ナナ^ハ」(異尊上P25L4)
 130) 「^ナナ^ハ」(異尊上P35L4)
 131) 「^ナナ^ハ」(異尊上P39L8)
 132) 「^ナナ^ハ」(異尊上P39L8)
 133) 「^ナナ^ハ」(異尊上P40L1)
 134) 「^ナナ^ハ」(異尊下P93L8)
 135) 「^ナナ^ハ」(異尊下P129L8)

125)~135)は、「異尊鈔」では、梵字・音訳漢字いづれも「^ナナ^ハ」「南・邦・曩」には、「平声点」が差されており、フリガナは「ナウ」であるが、梵字の音としては「na」であり、用音「ナ・ノウ・ナ」である。これも

「平声点」 — 「去声点」

の対立ではない。

125)~135)の「^ナナ^ハ」は、梵字・音訳漢字共にフリガナ「ホ」で「上声点」である。135)の「^ナナ^ハ」は、わざわざ「^ナナ^ハ」の割注があるにも拘わらず、「上声点」で、フリガナは「ホ」である。

- 136) 「^ナナ^ハ」(異尊上P25L3)
 137) 「^ナナ^ハ」(異尊上P25L3)
 s dhi ta nama
 138) 「^ナナ^ハ」(異尊上P48L7)
 139) 「^ナナ^ハ」(異尊上P48L7)
 140) 「^ナナ^ハ」(異尊上P48L8)
 141) 「^ナナ^ハ」(異尊上P83L3)
 142) 「^ナナ^ハ」(異尊上P48L6)
 142)と同じものが2例ある。

P48L7, P48L7

142)の「^ナナ^ハ」の3例は、「上声点」であるが、梵字「^ナナ^ハ」は短音である。

143) 「^ナナ^ハ」(異尊上P14L7, P30L8, P31L4, P31L4, P48L8, P69L1, P83L3, P87L8, P110L2)
 136)137)140)141)は、「平声点」であって、「去声点」と対立するものではない。

138)139)142)の「上声点」は、「^ナナ^ハ」に限られている。

144) ^ハハ^キ ^ハハ^キ (異尊上P14L10)

145) ^ハハ^キ ^ハハ^キ (異尊上P20L5)

146) ^ハハ^キ ^ハハ^キ (異尊上P57L3)

147) ^ハハ^キ ^ハハ^キ (異尊上P93L8)

148) ^ハハ^キ ^ハハ^キ (異尊上P35L4)

149) ^ハハ^キ ^ハハ^キ (異尊上P48L9)

150) ^ハハ^キ ^ハハ^キ (異尊上P39L9)

144)～150)は、いずれも「平声点」で、「去声点」と対立するものではない。

長音のフリガナに「去声点」以外を差した例は、特定の字「^ナナ^キ・^リリ^キ」にのみ限定されているようだ。

注 弥谷寺所蔵本「異尊鈔」の「上・下」巻、筆者撮影のフィルムによる場所を示す。

まとめ

少数の例外はあるが、弥谷寺所蔵本「異尊鈔」の梵字に差された朱点のうち、「去声点」は、長音のフリガナに対応している。これは、梵字の長音とは必ずしも一致していない。同じ梵字でも「短音のフリガナ」には「去声点」を差していない。あくまでも「長音のフリガナ」に対応しているのである。同じ梵字に対し、長短二種のフリガナのあることから、当該鈔本の書写時には、梵字の正確な読みの知識が伝わらなくなっていたものであろうことがうかがえる。

音訳漢字の声点は、梵字声点との対応が顕著であり、同質のものとして伝えられていたのであろう。

「入声点」は、特別なものとして、意識されていたらしい。¹⁾

「去声点」と「上声点」との使い分けは、フリガナを基準としているとして、一応理解できるが、「平声点」との使い分けについては、その基準が未詳である。

参考文献

- 1) 「弥谷寺蔵『異尊鈔』における梵字の声点について(一)」(1996, 森 孝宏「詫間電波工業高等専門学校研究紀要」第24号)。
- 2) 「訓点資料として見た漢文文献の諸相—陀羅尼部の訓点を手掛がかりとして—」(2005, 沼本克明「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」汲古書院)
- 3) 「来迎院如来蔵本『大般若経音義』紙背」(昭和53年, 汲古書院「古辞書音義集成 大般若経義大般若経字抄」)